
灰姫ノ歌-ハイヒメノウタ-

來澄 和樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰姫ノ歌 - ハイヒメノウタ -

【Nコード】

N 6 3 5 7 K

【作者名】

來澄 和樹

【あらすじ】

優等生を演じる私には裏の顔があった

毎日一人になれる場所を探して、夜になると家を飛び出す。夢も希望もなく、家に居場所もない……そんな私の目の前に現れた青年

何処の誰かも知らない彼との時間は、次第に私の中で大きくなって

……

自分とは？本当にやりたいことは？悩みながら成長していく、シリ
アスラブストーリー

夜想曲 - ノクターン -

夜を走る

今日もまた、いつものように家を出た

バイクに乗り、風を切る。さあ、今日は何処へ行こうか

きつと同じ所。いつもの場所。一人になれる空間

私は夜の静かな闇を、駆け抜けた

「ふう……」

私は毎日のように来る公園へ来ていた。バイクを止め、傍の川原へ向かう

都会の中とは思えない、小さな田舎の風景。この町には田畑があり、夜は静けさに染まる

私はいつものように、川の傍で立ち止まった。逸る呼吸を整え、深く息を吸い込み、いつものように歌い始めた

「ずっと、探していた……一人になれる場所……何処にあるの？何処にあるの？何処にも無いよ」

空を飛行機が通り過ぎる音を聞きながら、再び息を吸い込む

「本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた」

空を仰ぐ

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて……冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shining star」

ふう、と息を吐く。今日はちよつと声の伸びがイマイチだった

その場に座り込み、星を眺める。雲無く晴れた空は、しかし町の明かりに邪魔されて星は少なかった

きつと澄んだ空気の……そう、雨が降った後の冬の日には綺麗な星が見えるだろう。もう少し山の方に行けば、確実に

私は暫く目を閉じて耳を澄ませた

車の音、飛行機の音、酔っ払いの声、虫の音、川の音、草の音、風の音、私の呼吸音、静かな時にだけ聞こえる音ではない音……

此処にこうしている間は、この世界に私一人だけになったようで、楽しい

いつまでも、このままなら……良いかもしれない

けれど、不変は無いと、永遠は無いと知っているから……私は溜息を吐く。無いもの強請りか……無いとわかつているから、欲しく

なるのかも知れない。持っていないものは、いつだって魅力的に見えるものだ

欲しがるばかりでは、いつか報いを受けそうだ……そう思い、私は苦笑した

バイクに向かい歩きだす。風が冷たくなってきた

「バカみたい」

何がしたいの？夢は？何ができるの？目標は？

周りは、大人はそうやって聞いてくる。聞かれるたび、鬱陶しかった

だって、そう……危ないからって何もさせてくれないじゃないか。夢なんて叶うの？何も出来ないよ。目標なんてない

誰にでも夢があるなんて、大間違いなんだから

私はバイクのエンジンをかける。メットを被り、跨り走らせた

「希望なんか、あるかー！」

思いっきり叫ぶ。唇を噛み締めた

何も無い。言われるままに従ってきた。自分を隠していい子になったのに……突然それではダメになった。望まれるままの子どもを演じてきたのに

「んなの、どうしろってんだよ！」

段々イラついてきた。スピードを上げる

私は夜を走り続けた

雲一つない晴天。生徒会室の窓から、私は見上げていた

放課後の喧騒。部活動の風景。開け放した窓から、たくさんの音が流れてくる。軽音の練習か……ボーカルは高い音に苦戦しているようだ

「会長、何見てるんですか？」

「ん？別に。はい、これ。ハンコしといたよ」

「あ、ありがとうございます！会長はホント仕事早いですね」

「褒めても何も出ないよー」

そう言ってクスクス笑った。あー、私……ちゃんと笑えてるかな？

「神谷会長、先生が呼んでます」

「はい」

私は立ち上がった。怠いなあ……眠いし

「優等生は楽じゃないね、ホント」

そうボソツと誰にも聞こえないように呟き、私は生徒会室を出た

私は神谷灰音。普通の高校に通う、三年生。因みに生徒会長だ

学校では明るく品行方正、成績優秀、文武両道……そんな優等生を演じている。勿論、私は天才じゃない。努力で何とかそのイメージを保っている

誰もが疑わないだろう。私の本当の姿なんて、誰も想像出来ないだろう

「あれ？灰音、何してんの？」

いや、ここにたった一人いたか。本当の私を知る人間が

「青空こそ、まだいたんだ？」

真田青空、同じクラスで小学生の頃からの親友。同じような境遇の中、育ってきた

「もう帰るけどね。灰音は生徒会？」

「うん。もうちょっとかかるかな」

「ふーん……ま、あたしもこれからバイトなんだ。終わったらメールするよ」

「わかった。じゃあね」

青空と別れ、廊下を歩く。職員室に行くのは憂鬱だなあ

私が知らない先生でも、私のことを知っている。生徒会長だし、当たり前なんだけど……。家の中と夜の闇以外では、誰が見ているか分からない。だから、いつだって何処だって、私は優等生の灰音になる

「じゃなきゃ、追い出される」

そういう、所謂優等生な人間になることが、祖母の資金援助の条件だった

「大学まで行かせてくれるってんだから、有り難いよね」

祖母、母の親……病んで狂った娘の子どもを孫として受け止めきれない人

正直、愛されていると思う。じゃなきゃ、ここまで育ててはくれなかっただろう。働いていない母の代わりに、お金を出し高校にまで行かせてくれている。バイトをしなくていい代わりに、生徒会か部活に入ること、成績優秀であることを求められた

きっと、母のような人になって欲しくないが為の条件なのだろう
そこまでわかっていても、納得出来るわけでは無いのだけれど……

私は職員室で先生から書類を受け取り、生徒会室へ戻る。仕事を片付け、役員達と一緒に学校を出た

「会長、さよならー」

「バイバイ」

後輩達に手を振り、私は自転車を走らせた。バイク通学出来たら良いのになー……

風を切る。私は歌を口ずさんだ

「ずっと、探していた……一人になれる場所……何処にあるの？何処にあるの？何処にも無いよ」

赤信号で止まる。通行人には聞かれなくて黙った。この先は上り坂。青になった瞬間、思いつきりペダルを漕いだ

「本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた」

下り坂になる。足を止め、勢いのまま下っていく

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて……冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shining star」

声が揺れるのは仕方ないけれど、少し高い音が擦れてしまったのは失敗だったな……

夕日が目の前にあり、眩しい。私は目を細めながら、まっすぐ道を走った

「タイミング悪ー。眩しいっつの」

もうすぐ家だ。今日も誰もいないだろう

自転車を置きカバンを持って、家の前に立つ。自分の家かどうか確認して、鍵を開けた

「ただいまー」

玄関の靴を見て、誰もいないことを知る。ここに来るまで、ここが自分の家かどうか自信が持てない自分に苦笑した

「周りは全然違う家だし、間違えたことないくせに……」

着替えて弁当箱を洗う。宿題を済ませ、夕食の準備に取り掛かった

「今日はこれで良いや」

どうせ食べるのは私一人だし、と取り出したのはレトルト食品のカレー

そこでポケット内のケータイが震えた

「青空か」

ケータイを開くと、青空からメールが来ていた。バイトが終わったらしい。ふと時計を見ると、短針は南南西にあった

「今日は早いな」

そう送ると、暫くしてから電話が掛かってきた

「もしもし」

『やほー、灰音。今何してた？』

「メール返してた」

『いや、そーだけど……じゃなくて!』

「ははっ、ごめんごめん。ご飯作ろうかと思ってたとこ」

そう笑いながら言えば、電話の向こうは不満声を漏らしていた

『あ、そーだ。今日も一人?』

「そうだけど……何なら来る? レトルトのカレーだけど」

『行く行くー。実はそれを狙ってたりにして』

だと思った。一人暮らしじゃ面倒だもんな

「あつそ。じゃ、待ってるよ」

『はいはい。んじゃねー』

電話を切る。ふと目の端に見えた鏡には、微笑んでいる私がいた

「さ、お湯沸いたかなーっ」と

そう言いながらケータイをポケットに戻し、私は用意を進めた

短針が西を向く頃、私達は居間でテレビを見ていた。青空がチャ
ンネルを変える

「見たいのあるの？」

「んにゃ、別に」

「そ」

私も見たいの無いし……そう思いながら、入れ替わる画面を眺め
ていた

「今日も行くの？」

「んー」

「あたしも久々に行こっかなー」

「行くのは良いけど、まだ行かないよ」

「わかってる。電話まだ来てないもんね」

電話……一日一回、夜に来る祖母からのコール。出ないと後がや
やこしい

と、噂をすれば何とやら。固定電話のメロディーが部屋に響いた

「電話……」

立ち上がり、電話に出る。相手は勿論祖母だ

「もしもし」

『もしもし灰音さん？』

「はい、こんばんは」

『こんばんは。今日もちゃんと家に居るようね。貴方の母のように、夜出歩いたりしないことよ。良いですね』

また、毎日同じことを……

「はい」

『灰音さんは、利口なものね。もう、そんなことはしないわよね。それでは、切ります。おやすみなさい、灰音さん』

「……おやすみなさい」

向こうが受話器を置いたのを確認してから、私は乱暴に受話器を戻した

「誰が利口だって？ふざけんな、バーカ」

「おー、怖ー」

「さ、ウザイ電話も終わったし、行こうか」

振り返り、笑う。青空も同じように笑っていた

「待ってました」

「お待たせ致しました」

二人で顔を見合わせて笑いながら、私達は戸締まりをし、家を出た

川原に並んで座る

私達は愚痴やら何やら言い合っていた

「進路、どーするの？灰音」

「さあ……まあ推薦でいけるし。お金は出してくれるっつーし……
やりたいことないし。青空は？」

「んー、遺産はまだあるけど大学ってお金かかるし、家賃とかあるし、就職かなー」

「就職先あんの？」

「無ければバイトでしょ。フリーター？」

淡い苦笑をしながら、青空は夜空を見上げていた

借金が原因で両親に捨てられ、祖父母に引き取られた青空。よく私も遊びに行ったが、二人とも優しくて良い人達だった。しかし、その二人は亡くなり、青空はアパートで一人暮らしをしている。借金は完済され、遺された遺産で青空は学校に通っている

「お金とか関係なくさ、青空は大学行きたくないの？美術とか勉強したいんじゃない……」

「んー、まあそうなんだけどねー」

お金無いと無理でしょ……その言葉に、つくづく思う。私は行く気もないのに大学へ行くのかと

だけど、あの人は許さない。高卒で就職なんて許しが出ない

私は溜息を吐いた

「そーいや、彼氏とはどうなわけ？」

「別にどうもないよ。普通」

「ふーん」

青空の彼氏には一回会ったことがある。偶然買い物先でデート中の二人にばったりと。相手は大学生。顔もなかなか良いし優しいそう、何より付き合いたしてから青空の笑顔が増えた。青空の悩みもきちんと受け止め、相談に乗ってくれているらしい

「手首は？してない？」

「そーいえば、全然。傷も消えてるし」

「良い彼氏だね」

「うん」

衝動的にカッターを手にしていた青空は、今はいないようだ

「灰音は？好きな人いないの？」

「いないって」

「えー。灰音、よく告られてるのに。良い人いないの？」

学校でのことですよ、それ

「優等生の生徒会長が好きなんでしょ。そんなの知らないよ」

「ふーん。ね、今日は歌わないの？聞きたいなー、灰音の美声」

「誰が美声なんだか」

「何言ってるの。中学の時の合唱部のエースが。……うちの高校、合唱部無いもんねー。もう灰音の歌聞けないのかなー」

「はいはい」

そう苦笑しながら、立ち上がった。深呼吸をし、口を開く

「ずっと、探していた……一人になれる場所……何処にあるの？何

処かにあるの？何処にも無いよ」

隣で青空が黙って聞き入っている

「本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた」

遠くから電車の音が聞こえる

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて……冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shinning star」

ふう、と息を吐き、座り込んだ。隣から拍手が送られる

「流石、歌姫と呼ばれただけはある美声！まだ健在だね」

歌姫で……地元中学校内の話でしょ。しかも三年前だし。ま、いいけど

「そりゃどうも」

「音大とか行こうと思わないの？」

「えー。難しくないか？歌は勉強とは違うし」

「そうだけど……勿体ないなー。あ、歌手は？デビューしちゃう？」

「それこそ、無理でしょ。許しが出ないって」

「うー……そっかー」

「噓、本当は懂れてる。でも、そんなの絶対叶わない……だから、
そう自分に言い聞かせる」

「さ、そろそろ行かない？」

「いーよ。どこ行く？」

「その辺走ろうよ」

今日の風は心地よい

私達は夜の闇に溶けていった

「神谷、これ配っておいてくれ」

「わかりました」

廊下を歩いていると、担任に呼び止められた。今日のホームルームで使うプリントを渡される

「助かるよ。じゃ、宜しくな」

「はい。失礼します」

軽く会釈して教室に向かう

「何々？……進路希望調査？最終確認……なるほど？」

この学年になると、この話ばかりだな……当たり前なんだけど

まだまだ、のんびりお気楽高校生でいたいと、そう思ってしまう
……だから余計に現実逃避したくなる

「はぁー……」

「何々？会長の憂鬱？溜息なんか吐いちゃって」

「青空……これ配つといてっさ」

ん？と覗き込んできた青空。その表情は、すぐに淡い苦笑に変わる

「なるほどねー。ま、仕方ないし。もう配るの？手伝うよ」

「優しいね、珍しい」

「あたしはいつだって優しいでしょ？」

「はいはい」

青空は本当に良い笑顔で笑った。私は、今どんな顔をしてるの？
段々、青空にも話せないことが増えてきた。前は何でも互いに話して、時にぶつかり合い、時に泣いて……親友って、こういうことを
言っただろうなって思った

だから、幸せな青空の顔を曇らせたくない。今、私は青空に遠慮
して悩みを誤魔化し、本当は笑えないくせに笑ってる

声を殺して、息を潜めて、泣けずに笑ってる

「灰音、どうかした？」

「ん？何が？」

「今、すごい無表情だったよ。今まで見たことない顔。大丈夫？」

気を抜くとダメだな

「大丈夫だよ。考え事してた」

「ふーん……気を付けないと、化けの皮が剥がれるよ」

こそつと囁き、青空は席に着いた。チャイムが鳴ったからだ

今から古典の授業。この先生はちょっと頼りない。いつもどこか間違えるからだ

「気、遣うなあ……」

ふう、と息を吐き、教科書とノートを出す

先生も来て、授業が始まった

「なーにが、神谷は推薦確実だから楽だな、だ！ふざけんなっ」

夜の闇に叫ぶ

「入学前から努力してんだよ！遊んできたやつらに言われたくねーんだ！」

ホームルームでの会話が蘇る。クラスメイトの発言に、顔を引きつらせながら笑っていた

「くそっ！」

ム力ついた私は、手近にあった石を思い切り川に向かって投げた

「ふう……」

ちょっと落ち着いた私は、いつものように歌い始めた

「ずっと、探していた……一人になれる場所……何処にあるの？何処にあるの？何処にも無いよ」

歌うと落ち着いてきた。私は、より歌に集中する

「本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた」

感情を込めて……成り切って……ここは私のステージ

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて……冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shining star」

空を仰ぐように、歌い切る。久々に上手く歌えた

と、背後から拍手の音が聞こえてきた。振り返ると、知らない人

「誰？」

「え……あ、ごめんごめん、つい……歌が聞こえてきたものだから、聞き入っちゃって。凄い上手いな。歌手がいるのかと思った」

「……どうも」

私は川に向き直り、座った。と、隣にさっきの人も座る

「何……」

「オレは鳳雅^{おつが}。こいつの散歩道でさ、毎日この辺通ってるんだ」

見れば、可愛い子犬を連れている。私の好みの犬種だ

「よく、ここで歌ってるよな？いつも綺麗だなーって思いながら、聞き惚れてたんだ」

「……そう。それはどうも」

私は横目にちらちらと彼を見た

顔はまあまあ。背も普通。ちょっと馴々しいけど、悪くはないかな。犬も可愛い

同い年かな？上かも……下ではないかな……

「こいつはリク。可愛いだろ」

「リクって言うんだ……おいで？」

手を伸ばすと、リクはきよろしなながらも私に寄って来た

「可愛いな、リクは」

抱え上げ、抱き締めた。リクは嫌がることもなく、大人しくしている

「人懐っこいんだ。絶対噛んだりしないし」

「みたいだね」

「犬、好きなのか？」

「うん、まあ」

リクの頭を撫でてやる。毛並みも綺麗だ

暫くそっやって座っていたが、ふいに凰雅が立ち上がった

「リク、おいで。そろそろ帰ろう」

リクは腕の中から、するりと抜け出して凰雅の元へ向かう
帰るんだ……と思いながら私は目線の高くなった彼を見た

「オレ、毎日この時間にこの辺散歩してるからさ、見かけたら声掛けてくれよな」

「あ、うん……」

「それじゃあ、また」

そう言っで、行っでしまった。何だか不思議な人だったな……よく歌を聞いてるって言っでたけど、それっでもしかして、よく私が叫んでることも聞かれてるんじゃないだろうか？

「ま、別にどーでもいいけど」

そう呟いて、私はバイクに跨った。今日は何だか走り回る気にはなれない

珍しく私は、まっすぐ家に帰った

「灰音さん、どこの大学へ進学するおつもりです？どっいった学科を希望なのかしら」

休日。祖母に呼び出され、家に行った。和室に正座はキツイ……座布団あっても無理！

「県内の私立大学を……学校内の推薦が取れそうなので、確実に合格出来ると思います。学科は経済学部を考えています」

「そうですか。私立を……」

「国公立の方が？」

「いいえ。そういうことを言いたいのでは無いのです。それよりも、灰音さん。貴方は経済学部へ行き、何をしたいのですか？」

「え？」

「大学へ行き、学び、そして貴方は何をしたいのですか？何になりたくて、何をしたいくて大学へ行くのですか？」

「そ、それは……」

しまった……今までそんなこと聞いてこなかったから、考えてなかった

それに、安易なことと言えない。上手く逃げつつ、はぐらかさなきゃ

「経済学を、学び……その、銀行か企業に就職が出来れば……」

「それは、灰音さんが本当にやりたいことなの？」

「っ……私は……」

祖母はすつくと姿勢良く立ち上がる。まだまだ元気だな、この人は

「もういいです。一度、しっかりお考えなさい。私は行く気もないのに大学へ行けと言った覚えはありません。灰音さんが本当にやりたいことを知りたいのです」

「……………はい」

私は祖母の家を後にした。こんな気持ちは久し振り……………この私が、抜かるなんて

この私が、神谷灰音が、完璧でないなどあつてはならない

祖母に心を見透かされたようで、動揺が隠せない。苛立つ。恥をかいたみたい……………

私は自転車に乗り、青空の家へ向かった

「あり、灰音？」

「やほー」

青空の家に上げてもらい、勝手知ったる何とやら。私は青空のベツドに腰掛けた

「どしたの？今日はお祖母さんの家に行くんじゃ……………」

「行ったよ」

「あー、それで不機嫌？分かりやすいなあ」

苦笑しながら紅茶を出してくれた親友に、お礼を言って一口飲んだ

私の好きなレモンティー。流石、好みは分かってる。砂糖の量もバッチリ

「で？何があつたの？」

「進路の話でさ……県内の私立大学の経済学部希望つて言つたんだ」

「うん。別に良さそうだけど、何か気に障つたの？お祖母さん」

「それがさ、それは本当にやりたいことなの？つて……行く気もないのに大学へ行けと言つた覚えはありません、とか言いだしてさ……ムカつく」

「ふーん……」

ズスツとレモンティーを飲みながら聞いていた青空は、天井を見ながら話した

「今まで、そんなこと言わなかったよね、お祖母さん」

「だからびっくりしちゃつてさ……私としたことが、抜かつた……」

「灰音、もし本当にやりたいことがあるなら、言つてみたら？お祖母さんはそれを言えつて言つたんでしょ？だったら、もしかしたら……」

「そーかなー……」

あの人が、許す？まさか……でも……

「このまま偽っても、元には戻れないよ。嘘は貫き通すことが罰なんだし」

「青空にしては頭の良さそうな事言っじゃない」

「あたしをバカにしてるな？」

「やっと気付いたか」

顔を見合わせて、悪戯っぽく笑う

「でも、どうすんの？」

「考える。学校にも、まだプリント出してないから間に合うし」

「あー、あのプリント……あたしもどうしようかなー」

「迷ってるんだ？」

「彼氏がさ、行きたいなら大学に行くべきだって……お金なら、何とかなるもんだからって」

「ふーん……ま、そうかもねー。奨学金とかもあるし、青空はバイト代ちゃんと貯金してるしね」

私はレモンティーを飲み干した

「はあー……ま、決めるしかないんだよなー」

「まあねー……んで？」

「ん？」

「灰音が本当にやりたいことって何？」

う……

「んー、んふふー」

明後日の方を向きながら、私は笑った

「こらこら、誤魔化すなって」

「ふふふ」

それから言うの言わないのと部屋でバカみたいにはしゃいで、笑いあった

いつのまにか青空は、もう言えとは言っていないかった

「じゃーね」

「うん。また、いつでもおいで。灰音なら大歓迎」

「ありがとう」

意外と長居してしまった青空の家を後にし、私は自転車を走らせた

もう、もやもやも苛立ちも欠片もなくて、ただ頬を撫でる風のよ
うに、私の心は爽やかに晴れていた

幻想曲・ファンタジア・

「よっ」

「あ」

今日もまた来ていた川原。座って月を眺めていると、背後から声を掛けられた。振り向けば、この間出会った人

「鳳雅くん、だっけ」

「そ、鳳雅。呼び捨てで良いよ」

「……そう」

この前と同じように、隣に座る鳳雅。傍らにはリク。手を伸ばして、頭を撫でた

「今日は歌わないのか？それとも、もう歌った？」

「え、ただだけど……何で？」

「そりゃあ」

ズイツと顔を近づけ、楽しそうに笑う鳳雅

「キミの歌が聞きたいから」

「……ち、近いよ」

思わず目を逸らすと、鳳雅はあはたと笑いながら離れていった

「ごめんごめん。で？歌ってくれる？オレのためにさ」

「鳳雅のため？何で私が……」

「良いから、な？聞かせてよ、綺麗な歌声」

そんなこと言われても……そう思い渋るが

「ほら、早く」

鳳雅に急かされ、仕方なしに私は立ち上がった

「別に、鳳雅のためじゃないから」

「はいはい」

月を見ながら、一度溜息に似た息を吐く。今度は月を見据えて、すうっと息を吸い込んだ

「ずっと、探していた……一人になれる場所……何処にあるの？何処にあるの？何処にも無いよ」

ノッてきた。観客がいるとやっぱ違う

「本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた」

私、ちょっと緊張してるんだ……でも、それが程良い。声のノリがいつもよりずっと良い。楽しい！

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて……冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shining star」

ふう、と息を吐く。歌い切ったという感覚に、自然と笑みが零れた隣から拍手が聞こえる

「凄い、流石！」

「どうも」

うわ、声擦れてる……頑張りすぎたかな

「ははっ、声擦れてるけど、大丈夫？」

「う……大丈夫」

座り、目を逸らしながら言つと、隣からは楽しそうな笑い声

ちょっとムツとして振り返れば、目と鼻の先にある凰雅の顔

「わ……！」

びつくりして後退ろうとした私は、しかし凰雅に手を掴まれ、阻まれた

「何……」

「今までで一番の歌声だった。オレのために、ありがとう」

「ばっ……別に、鳳雅のためじゃないって言ってるでしょ。今日は声がノッてただけ」

「そういうことにしておく」

「信じてないな?!」

ムツとして手を振りほどく。いつまで掴んでるのさ!?

「可愛い反応だなー」

「はぁ?!」

可愛い?どこが!

「キミは可愛いよ」

そんな見つめながら言うなよ……それと

「灰音」

「え?」

「キミじゃない。私は灰音」

「ハイネ……可愛い名前だね」

可愛い可愛い言うなって……そんなに言われたこと、今まで無いし

「別に、可愛くないよ。灰に音で灰音だし」

「ふーん。嫌いなのか？名前」

名前……あの人が付けた、ふざけた名前。私に相應しい名前

「私にぴったりだと思ってるよ」

そう言って自嘲した。鳳雅が訝しむ

「ぴったりって？」

「あの人が付けてくれた灰音はね、貴方は灰のように燃えた、いら
ない子なのよって意味なの。父親なんて見当が付きすぎてわからない
いし、私がいたら男は寄ってこない。あの人にとって私は、邪魔者
でしか無いってこと」

「あの人って、お母さんか？」

「そうだよ」

流石に、鳳雅からは笑顔が消えた

「オレには理解できないし、こんな時どう言えば良いのかもわから
ないけど……灰音、生まれてきてくれて、ありがとう。今まで生き
ていてくれて、ありがとう。出会ってくれて、ありがとう」

「鳳雅……」

そんなこと言われたのは初めてだった

「何で、そんな……」

まだ、互いの名前しか知らないのに

「オレは、そう思ったから。だから、ありがとう」

穏やかに笑う鳳雅を直視出来ない。俯き、小さく頷いた

「オレはさ、八月生まれだから鳳雅なんだ。八月って英語でAugustだろ？だから鳳雅だって……何か安易でムカつくって思ったこともあったけど、ちゃんと字画とか、漢字とか、いろいろ考えてくれて付けてくれたみたいで……それからは気に入ってるかな」

「誕生日覚えやすいね」

「だろ？それに、絶対英語のテストで八月は間違えないから」

嬉しそうに笑う鳳雅につられて私も笑顔になった

「灰音の名前の由来がそうだとしてみさ、もしかしたら字画的には凄く良かったりするかもしれないねーし。結構わからないものだぜ」

「今度覚えてたら調べてみるよ」

「ああ」

「悪い結果が出たら、凰雅のせいだから」

「オレのせいだよ」

苦笑する凰雅を見ながら、そんな結果を恐れていない自分がいた。
今は、心から笑っている

「じゃ、そろそろ帰るかな。リク」

凰雅が立ち上がる。リクも傍へ歩いていった

「あ、そうそう。灰音」

「ん？」

「オレ、灰音のこと好きだから」

「へ？」

「気にするな、オレが勝手に言ってることだ。じゃあな」

そう言っつて、凰雅はリクを連れ、行ってしまった

残された私は、呆然と凰雅が歩き去った方を眺め、呟いた

「気にするな、だあ？」

そんなもの……

「気にするに決まってるだろうが！」

何が勝手に言ってることだ、よ。そんなこと言われて、簡単に流せるわけ無いでしょ！

「何なんだ……一体」

突然現れ、歌えと言い、剩え好きだと言っ……こんな人間に出会ったのは、初めてだ

私は、はぁーっと肩を落とし、苦笑した

「ま、退屈はしないけどね」

星を仰ぎ、歌を口ずさむ。さっきは本当に上手く歌えた

それは、ただ単に声の調子が良かったから？それとも……

そんなことを考えながらバイクに乗り、私はまっすぐ家へ向かった

「灰音？何か良いことあった？」

昼休み。一緒にお弁当を広げる青空に、首を傾げられた

「別に？」

「えー、本当にー？」

怪訝な顔で見てくる青空に、思わず苦笑した

「何よ、疑って」

「男でも出来た？」

「だったらそう言ってるって」

「そうかぁー。ふむー」

考え込み始めた青空に益々苦笑する

「だから別に何も無いって。気のせい気のせい」

言いながら玉子焼きを口に入れた。うん、我ながら上出来

「そーかなー……」

しつこいな

「でも、何で？」

「だって今日の灰音、楽しそうだからさ」

「楽しそう？」

「そ。いつもの仮面笑顔じゃないし」

仮面笑顔で……

「偽りっていうか、気取ってないっていうか……自然体？みたいな

カンジ」

「ふうん？」

「考えて演じてるのは違うよ、うん」

「そう……」

全然気付いてなかったけど、確かに今日の私は演じることを忘れてた

「気を付けないと、ぼろが出るな……」

「何で？あたしは好きだけどなー、今の灰音。いつもの凜としたカンジとは違って、柔らかいカンジがするし」

「それでも化けの皮を剥がすわけにはいかないの」

「余計なこと言ったかなー。でも、珍しいよね。灰音が気を抜くなんて。やっぱり完璧主義なんて疲れるだけだよ」

完璧主義、ね

「それは元々の性格なんだから、仕方ないよ」

「意識の問題でもあると思うけどなあ」

「はいはい」

最後の一口を放り込み、弁当箱を片付ける。お茶を飲み、カバン

に入れた

「もう食べたの？」

「食べたよ」

「同じくらい喋ってたくせに……」

ぶつぶつ言いながらご飯を放り込む青空

「早くしないと、置いてくぞー」

「だから急いでるでしょー」

次の授業は美術。早めに行って、前の続きをするのだ

「今日で終わらなきゃ、宿題だよ」

「嘘っ、授業は今日まで?! うー、終わるかなあ……」

来週の美術では、また違うことをすると言っていた。今日で仕上げないと、放課後も行かないといけなくなる

「青空はいつも手が込みすぎてるんだよ」

「そうなるんだから、仕方ないでしょ」

食べ終わった青空と一緒に立ち上がり、筆箱を持って教室を出た

「灰音は? 今日で終わるの?」

「あとちよつとだから、たぶん時間余る」

「その時間分けてほしいよ」

「はいはい。頑張つて」

青空の美術のセンスは抜群で、いつも授業で作る作品は高評価を得ている。美術部からの勧誘も何度もあるが、バイトや家庭事情を理由に断っている。きっと本当は、やりたいんだろうな……

「じゃ、授業始まるまで青空が作ってるトコ見てよーっと」

「う……余裕か」

「余裕だよー」

ふふふー、と笑いながら青空の席の隣に座る

作られていく作品を見ながら、やっぱり勿体ないな、とも思った

「はーいねっ」

「普通に呼んで、鳳雅」

振り返らずに返事をする。見なくても誰だかわかってしまった

「普通？はっちゃん、とか？」

保育所時代のあだ名だ、それ……

「違うって、もう……」

「ははっ」

わざとだし……

この場所で凰雅に会うのが日課になってきている。約束なんてしてないのに……

「リク、おいで」

リクはたたつと駆け寄ってきた。頭をよしよしと撫でていると、凰雅が不満そうな声を漏らす

「良いなー、リク。オレも犬になりたい……」

「何言ってるの」

犬じゃ会話できないでしょうが

「ちえっ……な、まだ歌ってない？」

「まあ、ね」

「オレが来るの、待っててくれたとか？」

言いながら隣に座り、顔を近付ける凰雅

「別に、偶々でしょ。後、近いつて」

「はいはい。じゃ、歌って？オレのために」

「だから何で鳳雅のため？」

「オレが灰音の歌声、独り占めにしたいから」

「何、それ……」

「灰音のことが好きだから」

ニツと悪戯っぽく笑う鳳雅。くそ、格好良い

「何言ってるの」

「本当のこと。大丈夫、勝手に思ってるだけだから気にせず歌って」

何が大丈夫、よ

「ほら」

促され、じつと見つめられる。居たたまれなくなって、仕方なしに立ち上がった

肩の力を抜く

「ずっと、探していた……一人になれる場所……何処にあるの？何処にあるの？何処にも無いよ」

足を少し引く。より歌いやすくなった

「本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた」

鳳雅の視線を感じる。このドキドキは、緊張のせい……？

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて……冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shining star」

ふう、と肩を下ろす。隣を見れば、拍手と優しい笑顔

「歌姫だな、灰音は」

「何それ。しかも中学の時のあだ名だし」

「へえー、そう呼ばれてたんだ？」

「中学の時、ちょっとね。合唱部だったんだ」

「ふーん」

座り込み、空を仰ぐ。曇ってるなー、今日は

「いつも歌ってる歌って、もしかして自作だったりする？」

「そうだけど」

「凄いな！作曲出来るのか」

「うん、まあ……短いしか作れないけど。さっきのだって、まだ二番の歌詞が決まらなくて。しっくりこないって言うか……」

最近、良い言葉が思い浮かばない。飾った言葉は嫌だ。自分自身の言葉を音に乗せたい

「へえー。あ、作曲出来るってことはさ、ピアノとか出来るんだ？」

「あー、まあ、ね。小学生の頃に習ってたから」

「そっか……でも凄いなー。歌上手いし、ピアノ弾けるし、作詞作曲出来るし、綺麗だし」

綺麗？

「何が綺麗？」

「何じゃないよ……灰音が綺麗だって言ったんだけど」

「要らないよ、お世辞なんか」

「お世辞じゃねーよ」

凰雅の口調が変わった。楽しそうな、飄々とした雰囲気が一変。真面目でまっすぐな視線が、私を射ぬいていた

「凰雅……？」

「綺麗だよ、灰音は」

何だ、これ……声が出ない。鳳雅から視線を外せない

お、落ち着け、私っ！

「あ、えっと……」

流されちゃダメだ。しっかりしろ、灰音！

私は勢い良く立ち上がった。まっすぐ、目の前の川を見つめる

「そ、そろそろ帰ろうかな」

こ、声が震える……

それに鳳雅の顔が見られない

「じゃ、じゃあね、鳳雅……」

そのままくると踵を返し、バイクへと歩いた

鳳雅は何も言わない

メット越しにちらりと窺った鳳雅の顔は、いつものような、優しい
げな笑顔だった

「灰音、気を付けて帰れよ」

「うん」

私はそう頷き、バイクを走らせた

「何なんだ、一体……」

最後に見た鳳雅の顔が、頭から離れない

「何で……」

どこか寂しそうな笑顔だった

「もうっ!」

私は頭をぶんぶん振り、夜に叫びながら、闇を駆けていった

「会長、ハンコお願いしまーす」

「ん、りょーかい」

放課後の生徒会室。後輩役員から書類を受け取り、私は仕事をしていた

のどかな陽気、爽やかな風。あー、良い天気ー

開け放した窓から聞こえてくる、野球部の掛け声や吹奏楽部の奏でる旋律が、ここが学校であることを耳から教えてくれていた

「会長、秋からはいないんですね……」

学校にはいるけどね

「そりゃあ三年生は忙しくなるものねー。秋からは後期の子達に頑張ってもらわないと」

「うー、何か寂しいですー」

「あははっ、ありがとう。もう少しの間、宜しくねー」

「勿論です！」

次の選挙からは、一年と二年が立候補することになる。私の仕事も、夏が終わるまでだ

「副会長、次は会長に立候補ですか？」

「良いんじゃない？副会長なら出来るよ」

「そうですか？オレ、会長みたいになんて出来ないますよ」

二年の副会長が謙遜する。ま、やりたい人がやるべきでしょうねー

「またまたー。ね、会長。副会長なら適任ですよねー」

次の会長決めるの、私じゃないんだけど……

「そうね」

実のところ、どうでもいいけど

「ほらー、会長もこう言ってるし」

「そうかなあ……」

お、副会長。まんざらでもなくなってきた？

わかりやすいなあ……

「はい、ハンコ押したよー」

「あ、ありがとうございますー」

主要行事も終わつたし、今は暇だなー

「会長は、何処の大学行くんですか？」

ん？

「会長つて、やっぱり推薦ですか？」

んん？

「神谷なら推薦だろ」

んんん？

私は推薦で大学進学決定ですか？

ま、そういうイメージ作ってきたんだけどー

……何か毒づきたい会話なんだよね、進路って。っと、抑えて抑えて……

「一応、推薦かなー」

「やっぱりー」

「会長、私祈ります！合格祈願！」

「何言ってるの。会長なら合格確実でしょ」

「そうだけどー」

合格確実、ね

「合格祈願か、ありがとう。じゃあ益々頑張らないとねー」

「はい！私お祈り頑張ります！」

この子達に、他意は無いってわかってる

この子達だけじゃない。クラスの皆もそう……私が作り上げた、優等生の私へのイメージ通りの言葉を投げ掛けているだけ

だから、その言葉に腹を立てるのは間違ってる。そう仕向けたのは、自分なのだから

「まだまだ、だな……」

「何か言いました？」

「ううん、何でも」

それでもやっぱり腹を立てたりするのは、私がまだ自分をコント
ロール出来るほど、出来た人間じゃないから……まだまだ子どもっ
てことなんだろうなー

実際子どもですけど

「良い風……」

窓際に寄り、空を眺める。ふと思いついた詩に、思わず苦笑した

「らしくないな」

その詩は、今まで書いたどの詩とも雰囲気もイメージも違ってい
たけれど、私は好きになれそうだった

『二番の歌詞ー！？聞きたーい！』

夕方、家に響く青空のケータイ越しの声

子どもみたいだな……

「まだ細かいとこ決まってないし、今度ね。今からまたバイトだろ
うし」

『よくわかったな……超能力者?』

「何言ってるんだか」

『あははっ、じゃあバイト行ってくるよ』

「ん、頑張ってる」

『はいよー』

電話を切り、宿題を片付ける。時計を見ながら、夕食は何にしようかと考えていた

「めんどくさいなー」

自分一人だし、毎日毎日面倒になる

「さ、宿題終了ー」

ノートを片付け、別の小さなノートを開く。これにはオリジナルの詩を書いていつているのだ

「えーと……」

あの時思いついた詩を書き並べる

「風が吹く……吹き、うつん、音を乗せ……吹き抜ける……」

メロディーに乗せ、口ずさみながら、ペンを走らせる

「本当は……本当は……うーん……気付いたよ？違う、知ってたよ？あ、探してた！これにしよう」

夢中になって言葉を繋いでいく。今この瞬間、溢れる想いを込めて「ずっと、見上げていた……終わりにき広い空……風が吹くよ。音を乗せた風。吹き抜ける町」

歌ってみた。うん、ちゃんと音に乗る

「詩はこんなカンジかなー」

そう満足し、今度は電子ピアノの電源を入れた。さっきのノートを立て掛け、横に手書きの楽譜を置く

「ちょっと久々だな」

楽譜を見ながら、曲を弾き始める。一回軽く弾き終え、次は弾き歌いをし始めた

「ずっと、探していた……一人になれる場所……何処にあるの？何処にあるの？何処にも無いよ」

もう一番は慣れたもの。歌詞もばっちり覚えているから、歌に専念出来る

「本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた」

ピアノは久々だけど、ちゃんと手が覚えている

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて……冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shining star」

さて二番、と思っていたところにかかってきた、常例の電話

溜息を一つして、電話を取った

「もしもし」

『もしもし、灰音さん？こんばんは』

「こんばんは」

『今日もちゃんと家に居ますね。そうそう、先日お話した大学の話、いつ聞かせて下さるのかしら？』

……大学、ね

「そうですね……近いうちに伺います」

『そうですか、わかりました。それと……』

祖母の声が刹那止まる。何事かと耳を澄ました

『あの子は、帰っているのかしら？もう、ずいぶ「いいえ、もうずっと私一人です。すみません、料理中なので他に用が無いなら切りますね」』

料理中と言えば、絶対電話は切れる

『え、あ、ええ……わかりました。それでは近いうちに聞かせて下さいね。待ってますよ。おやすみなさい、灰音さん』

「おやすみなさい……」

向こうが切ったのを確認して、ちよつと乱暴に切った

「あの子だあー?! 何言つてんだか。んなの知るかっの!」

あんたの娘の居所なんか知るか! ずっと帰ってきてないし、知りたいとも思わない

「あー、もうっ!」

ずかずかとピアノに向かう。もう歌う気にはなれなくて、楽譜をパラパラと捲った

目に止まったのは、ベートーヴェンのピアノソナタ。激しい曲だ

「よし」

息を吸い、弾き始める。そうやって気に入っている曲を、次々と思いつきり弾いていった

「いったあー……」

暫くすると、私は突っ伏していた。小さい手を無理に広げ、指は赤くなっている。腕も疲れてしまった

しかし

「すつきりー」

良いストレス発散になった

「んじゃ、今日はここまでー」

楽譜を片付け、電源を切る。時計を見て、台所へ向かった

「ずっと、探していた……」

口ずさみながら、夕食を作り始めた

「一人になれる場所……何処にあるの？何処かにあるの？何処にも無いよ」

そこで歌を止めた

「一人になれる場所……ね」

何処にも無いなんて、嘘だ……。本当に一人になりたければ、なれる。ただ、そんな勇気が無いだけ。一人になりたくて、一人になりたくなかった……

「一人で生きていける人が、一人なんだ」

一人になりたい時もあるよ。ただ、孤独になりたくないだけ

「本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた」

夜はいつも走り抜けていた。でも、何も見えない暗闇は、いつだって避けてきた。本当の夜も避けてきたんだ

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて」
私の願いつて、本当は何なんだろう……？

「冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shinning star」

数多の星輝けど、名は知らじ。されど我は恋焦がう。星屑なれども、かの煌星に。いつか我もと、恋焦がう

……なんてね

「さ、出来た出来た。……ん？」

「ご飯も出来上がり、箸やお茶を用意しようとした時だった

「雨？今日降るって言ってたっけ？」

雨の音、雨の匂い。少し、湿度のせいで暑くなる

雨はあんまり好きじゃない。濡れなくなる時もあるけど、バイクに乗りにくいし、なんだか憂鬱になるから

「今夜は走れないか……止めとくかな」

そういえば、最近雨は降っていなかった

「長引きそう……」

凰雅に会ってから、初めての雨。凰雅は今夜も、あの場所にいるのだろうか

「散歩はしてあげなきゃいけないしね」

私を待ったりなんて……しないよね？

「雨だし、凰雅もさっさと帰るでしょ」

うんうんと頷きながら、そう呟く。まるで、自分に言い聞かせるように

「ま、次会った時に話せば良いよ、うん。さ、食べよ」

テレビを見ながらご飯を食べる。ちらつくのは凰雅の顔

こんなに意識したのも初めてかもしれない

「なんかムカつく……」

ムカつくのは凰雅か雨か、それとも自分が

「はあー」

特に見たいものもなく、テレビのスイッチを切った。ご飯を食べ

終え、台所へ食器を運ぶ

と

ガチャツと玄関のドアの開く音がした

一瞬で背筋が凍る

心臓を冷たい手で鷲掴まれたかのような感覚

血の気が引くとは、このことを言うのだろう

「灰音ー、いんだろー？出てきなー」

声を聞かなくてもわかった。ドアの開き方、閉まる音、足音、空
気……それが全て物語っていた

あの人が帰ってきたのだと

狂詩曲・ラブソディー・

「灰音えー？」

一瞬フリーズしていた私は、名前を呼ばれ我に返った

「出て来いって。無視してんじゃないよ！久し振りに帰ってきた母親を出迎えないっての？」

その言葉にムツとして、私は玄関へ聞こえるような声を張り上げた

「出て来いだあ？！誰が行くか！調子乗ってんじゃねえ！」

「おー、相変わらず言うなあ、母親に向かって……変わらないねえ、灰音」

「母親？あんたに育ててもらった覚えはないね！」

「あははっ、あたしも育てた覚えはないねえ！」

声が段々近づいてくる

ドアが開き、見たくなかった顔が視界に入った

「よっ、灰音。ん？大きくなった？」

「……………」

うわ、酒臭い……

「傘持っていないからさあ、ちょっと濡れちゃったよ。タオルは？」

「……………」

「もうご飯食べた？何か残ってない？」

「……………」

「何とか言えよ……………」

ずっと黙っていると、イラっときたらしい。声音に凄みが出てきた

子どもの頃は、それだけで恐くて脅えていた

でも、今は違う

「知るか。自分の家だろ。勝手にすれば」

「あー？」

「何だよ……………」

そう言っただけで睨んでやったら、面白くなかったらしい。舌打ちをして、その辺にあったタオルを手に台所へ向かっていった

「また男に捨てられたのかよ……………」

この人が帰ってくるのは、いつだってそう。男と上手くいかなかった時だ

いつも男の家に転がり込むから、ここには殆ど帰ってこない

今度はいつまでいるんだろうか

私は早々にお風呂へ行き、寝ることにした

「帰ってきたの?!」

「そ。昨日、ね」

「そつか……灰音、頑張ってるんだね」

昼食を終えた昼休み。中庭のベンチでのんびり池を眺めていた

「お祖母さんは知ってるの?」

「知らない。帰ってきたの、電話の後だったから」

「ふーん……何か、いろいろ大変だなあ」

「いろいろ?」

青空の言葉が妙に引っ掛かった

「いろいろって?」

「ん?んー……最近、彼氏と全然会ってなくてさ。メールしても返

つてこないこと増えだし、電話も繋がらないし……連絡、取れなくて」

「……………」

空元気な青空の顔。切ないまでの、笑顔だった

「前に、これからちょっと忙しくなるって言ってたから、そのせいだと思うんだけどさ」

「そう……………」

それで明るさに欠けていたのか……

「青空は、寂しい？それとも不安？」

「……………両方」

「信じてない？」

「信じてる！-」

勢い良く顔を上げ、力強く声を上げた青空。ハツとして、淡い苦笑を浮かべ池を見つめる

「……………うん、信じてるよ。信じたい」

ぎゅっと握られる拳。もしかしたらという不安に、心が揺れているのかもしれない

「昨日、雨降ったでしょ？」

「え？あ、うん……」

突然話題を変える。青空が目に見えて戸惑った

「だから昨日は歌いに行っていないんだよねー」

「そうなんだ」

「今日は絶対歌いに行くぞ！またさ、そのうちカラオケ行こうよ」

そう言つと、青空はいつもの笑顔で頷いてくれた

「やった！灰音の生ミニライブだ」

「えっ、ライブ？歌うの私だけ？」

「そーだよー」

「何だよー。折角カラオケ行くんだから、青空も歌ってよね」

「はいはい」

あははっと笑う青空は、いつもの様子で。私は安心して一緒に笑っていた

「ただいまー」

生徒会も仕事がなく、今日はすぐに帰宅した。本当は出来るだけ家には居たくないのだけれど、青空はバイトだし、図書室は本の整理が何かでゴタゴタしていたし、近所の図書館は休館日。公園や喫茶店に一人でいてもつまらないし、知り合いに出会っても何だか嫌だ。だから仕方なく、まっすぐ家に帰ってきた

「何だ、いないのか」

だったらうろろしないで、早く帰ってくれば良かった

「きつたない。ゴミくらい袋に入れとけよ」

あの人は家にはいなかった。しかし酒の空き缶やら何やらのゴミが部屋に散乱し、タバコの臭いも残っている

「くっさー……ったく」

窓を開け、換気扇を回す。ゴミを片付け、部屋を元通りにした

「んーと……」

宿題をしようと、カバンからプリント類を取り出す。今日は英語、古文、数学だ

今日はちょっと多いな……なんて思いながら、古文に手を付けた。これは教科書を見れば、すぐに出来る。得意教科だし

カチコチと時計の針が音を響かせる。時折、車やバイクの音が聞こえた

暫くそうやって机に向かっていると、突然お腹が鳴った

「む……お腹空いた」

後ちよつとで宿題も片付く。やり終えたら、少し早い夕食を作ろう

「よし、これで……出来た！しゅーりょーっと」

教科書類を片付け、台所へ向かう。あの人の分は無視して、調理を始めた

「ずっと、探していた……一人になれる場所」

呟くように歌い始める。頭の中でぐるぐると、この歌がループしていた

「何処にあるの？何処かにあるの？何処にも無いよ……本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた」

凰雅の顔が思い浮かぶ。今日は会えるかな？

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて……冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shining star」

出来たばかりの二番。最初は、凰雅に聞いてもらいたい

「ずっと、見上げていた……終わりにき広い空……風が吹くよ。音

を乗せた風。吹き抜ける町」

ふいに玄関のドアが開く。その音に、歌うどころではなくなった

「たっだいまー」

「……………」

ズバズバと居間へ歩いてくるあの人。私は無視して調理を終えた

「ふーん、ちゃんと料理してるんだ。あたしの分は？」

「知るか」

「あつそ」

簡単に不機嫌になる人を放って、私は食事を始めた。あの方は勝手に冷蔵庫を開けたりしている

「料理なんか誰に教わったんだか」

少なくとも、あんたじゃないよ

そう胸中で毒づきながら、黙々とご飯を食べる私

「掃除、洗濯、料理、勉強……あんた、誰に似たんだか」

独り言のように呟くあの方は、酒を手に居間へ向かった

テレビの音声が聞こえてくる

「ご飯を終えた私は、食器を洗い片付けた

その直後鳴る電話の着信音

私は溜息を一つして、電話を取った

「もしもし」

『もしもし、灰音さん。こんばんは』

「こんばんは」

『何も変わり無いですか？』

変わり無いわけあるか

「帰ってきましたよ。代わりましょうか？」

『……………帰って、きた？帰って、きたのですか？いつです？今そこにいるのですか？』

代わるうかつて言ったし、今

「何？電話？」

「お祖母様からです」

嫌味を込めながら、電話をあの人に無遠慮に差し出した

眉間に皺を寄せながらも、あの人は電話に出た

「どーも」

何を話しているのかは聞こえないからわからないけど、電話の向こうの人が興奮して怒り混じりに叫んでいるらしいのが、伝わってきていた

「あんまり刺激すると、倒れるよ、お祖母様」

あの人に聞こえるように、揶揄を含めて言う

「さーで、と」

バイクに乗って出て行きたいところだが、私に代われとか言いだしたらいけないし。この人、正直に出て行ったって言うだろうし

「早く終わってくれ」

仕方なく私は、終わるのを待つことにした

「長電話ー！」

夜空に叫びながらバイクを走らせる

いつものコースでいつもの場所に行き、いつもの川原に立った

「誰も、いない……」

そろそろ、いつも凰雅と会っている時間。私は夜空を見上げながら、凰雅が来たら何て言おうかと考えていた

二番が出来たんだ

まだ誰の前でも歌ったことないんだよ

折角だから聞かせてあげる……なんて、おこがましいかな？

でも、凰雅なら笑って聞いてくれるよね

雨の日はどうしてた？もしかして、待ってた？

私、雨の日は来ないんだよ

たくさん、話したいことがあるんだ

歌も聞いてほしい

早く、来て

ねえ、凰雅……

どうして、来ないの？

「凰雅……」

一時間は経っていた。とっくに会えている時間を過ぎている

「そりゃあ、約束なんてしてないけど……」

どうしてだろう

会えることが当たり前なんて思ってた

会えなくてショックを受けてる。不安になってる

「……鳳雅」

よく考えたら、私鳳雅の何を知っているんだろう

「名前以外、知らない……私、鳳雅のこと、何も……知らないんだ」

名字も年齢も住所も何をしているのかも知らない

鳳雅という名前と、リクという犬を飼っていること、毎日この時間にこの場所に来ること……それだけだ。それは、向こうも同じことなただけ……

「はぁー……行くか」

いつまでもここにいたって仕方ない

歌う気分にもなれないし……

私はバイクに乗り、気が晴れるまで、闇を走り続けた

「もう少し走ってくれば良かった……」

家に帰れば、あの人はテレビを見ながら酒を飲んでいた

……出ていく前と変わってない

「あ、おかえりー」

最近、機嫌良いな、この人

「こんな時間に夜遊びとは……灰音、あんたもやるねえ」

楽しそうだな……

「優等生の仮面被って、周りを騙して……本当のあんたは何処にいるんだろうね？」

「本当の私？ふん、あんたが言う？」

「本当……言うようになったな。にしても、バレたら面白そうな話だよー」

バレたら？ここまでやってきて、そんなヘマするかっての

「そうになったら、どうなるんだろうねー」

クスクス笑いながら、楽しそうに酒を飲むあの人

私はフン、と言って無視し、寝る準備を始めた

次の日も、鳳雅は来なかった

私は何かしら鳳雅が来れない理由を勝手につけて、自分に言い聞かせていた

「青空？」

鳳雅に会えず、へこんでいた私に、青空から電話がかかってきた

『ごめん、突然……今大丈夫？』

「今帰ってきたところ。大丈夫だけど……どうかした？」

何だか青空のテンションが低い。こんな状態は、前にも何度かあった

青空に何かあったんだ

『んー……ごめんね、嫌な話だと思うけど……灰音ってさ……知らない子って言われたんだよね。名前も、そういう意味があるんだよね』

「そうだけど……何？急に」

妙に歯切れが悪いな

『その……家の本棚整理してたらさ、漢字と名前について書いてある本見つけて……それ、見てただけ……あたしの名前さ、青い空でしょ?』

「うん」

『青は良いんだけど、空の方がね……』

空の方?

『良くない意味が、あるんだって……空に近づくとかいう、死を意味する漢字だって……書いて……』

青空……

『こんな本あって、知らないわけ無いよね?!知っててこの名前付けたんだよ!あたしは……あたしなんか……いないんだ!』

「青空!」

私は思いつきり叫んでいた。冷静さなんて、失っていた

「甘えたこと言うな!いらない子?!本当にそう思ってるの!?」

『……何よ……いつもそう言って笑ってたの、灰音のくせに!何でそんな風に言われなきゃいけないの?!』

「あ、いや……」

『灰音ならわかってくれると思ってたのに!』

そう叫ばれ、電話は切れた

私は冷静さを取り戻していた

「……………」

ケータイの待ち受けをただ見つめる

言いたいこと、伝えられてない……

「青空……………」

言い方、悪かったかな……確かに私、いらない子なんだって笑って言ってたっけ。青空も不安とかショックで、冷静さなんて失っていたかもしれない……傷つきやすい状態かもしれないのに、私はちゃんと話を聞いて受け止めてあげるべきだったのに

「私のバカ……………」

ただ、忘れてほしく無かっただけ……楽しかった思い出まで、否定して欲しくないと思った……でも、それを伝えられなかったのなら、それは言い訳でしかないんだ

私はそれから何度も電話を掛けてみたけれど、繋がる事はなかった

次の日、学校で青空には会えなかった。欠席した青空が気になり、私は青空の家を訪れた

「追い返されるかと思った」

「……二時間も家の前に居座って……あたしが困るんだから」

そう言いながらも、私を家に入れて飲み物を出してくれた青空。
やっぱり優しいな

私はどうしても青空と話がしたくて、青空の家の前に二時間居座った。そのおかげか、こうして私は青空と話している

うん、頑張った、私

「用は？」

「あ、うん。はい、今日の授業ノートとプリント。テストも近いし、必要だと思って」

「……ありがとう」

「それと、話があるの」

「……」

青空は何も言わない。私は続ける

「昨日は、ごめん」

一度頭を下げ、もう一度青空に向き直った

「青空の気持ちも考えないで、一方的にあんなこと言って……でも、私青空が羨ましかっただけなんだ」

「え？」

「子どもの頃話してくれた、家族との思い出。怒られたこと、遊びに行ったこと、楽しそうに話してくれたよね。そんなの私には無かったから、ずっと羨ましかったんだ。それなのに、青空は忘れたの？」

「思い出……」

「そうだよ。忘れないで。楽しかった思い出まで、消して欲しくない。折角、楽しい思い出あるんだから、ね？それに、疑うなんて青空らしくないよ」

「でも……」

「ねえ、青空。私思っただけど、もし青空の言う通りの意味を名前に込めたいなら、青なんて付けないんじゃないかな？」

「え……」

「だって、空にはその意味があるけど、青空になったら意味も変わるかもしれないよ？それに、名字とのバランスっていうか、画数とかで、凄く良い名前かもしれない」

「……」

「それに、あんまり気にしなくて良いんじゃない？いつも、占いと

か信じてないくせに。らしくないよ、本当。青空はきっと、いろいろあつて冷静に考えられなくなってるんだよ」

最近連絡の取れない彼氏。進路の悩み。そして名前……いろんなことが、青空にのしかかつて来ていたんだ

「そう、だね」

「うん、そう思う」

ついこの間までは、思えなかったことだけど

「後さ、空って漢字にそんな意味があるとしても、私は空、好きだよ。だって大きくて、綺麗で……そんな空、良いと思うんだ」

「そっか……うん、そうだね。ごめん……ありがとう」

「うん……」

これ以上は、私からは何も言えない。せめて、彼氏と連絡が取れたら良いのに……

それでも、青空とは話が出来るようになった。私が素直に気持ちい話を話せたからかもしれない。ちょっとぎこちないのは、まだ青空が気持ちを整理できていないからだろう

「それから……」

私は表情を引き締めた

手を伸ばし、青空の左手首を掴む

「さっきから、ちらちら見えてるんだけど……また、ダメだった？」

「……………」「ごめん」

私は手を離す

「謝る必要は無いんだけど……ただ、そこまで追い詰められてたんだなって思っ……」

「……………」

「これするの、久し振りだね」

「うん……彼氏と付き合う前までだったから、してたの」

「そっか……これをして、ちょっとは落ち着いた？すぐ消えそう？」

数も少ないみたいだし、深くもないみたいだったから、大丈夫だとは思っけど……

「うん、落ち着いた。残ることは無いと思う」

この行為を衝動的に行うことは怖いけど、これにより落ち着けるのも確からしい

わからなくは、ないけれど

「彼氏には、気付かれないようにね」

「たぶん気付かれると思うけど……このままも、ダメだね」

下手に隠そうとする方が目立つかもしれないけど

確かにそのままだと思う

「さて、お腹すいたな……」

「あたしも」

学校帰りに直接青空の家に来て、二時間程居座り、それから話をしていた

私も青空も何も食べていない

実際、食欲が無かったと言うのが正しいのだが

「ホッとしたら、お腹鳴った」

「灰音……」

私の言葉に苦笑する青空。良かった、いつもの青空だ

「どうする？何か食べてく？」

「んー、どうしようかな……」

そんなことを言っていると、来客を告げる音が聞こえてきた

「こんな時間に……？」

青空が玄関へ向かう。と、青空の音がすぐさま聞こえてきた

「え？嘘……」

気になり、私も見に行く。と、そこには青空の彼氏がいた

「何で……」

「ごめん、青空。今まであんまり連絡出来なくて」

「とりあえず上がって」

驚きつつも、青空は嬉しそうだ。当たり前だが

「青空、私はそろそろ帰るね。邪魔だろうし」

「えっ、そんなことないのに」

いやいや、私が居たたまれないんだけど

「もう遅いし、ね」

「あ、ごめん、何か追い出しちゃうみたいで……」

彼氏さん、良い人だ

「いえいえ。じゃ、またね」

青空に手を振って、私は家に帰ることにした

「ふう……」

溜息を吐き、私は空を眺める

「そういえば、青空がこうなるの、久し振りだな」

青空は大丈夫……きつと、大丈夫

青空の両親は、あの人とは違う

捨てられたのは、確かだけど……それでも最初は、普通の家族だった。仕事が上手くいかなかったある日から、様子がおかしくなっていた

「彼氏さんとも会えたし、大丈夫……うん」

私は悩みが一つ消えて、少し気が楽になっていた

「あーあ……」

私は？

私はどうだろう

あの人が帰ってきて、進路で迷って、凰雅に会えなくて……ちょっと気分が沈んでる

何かきつかけがあれば、病んでるかもしれない

「本当……強くなりたい……」

揺らぎたくない

強くなりたい

私は月を眺め、歩いた

「はいねっ」

「……………どうしたの？気持ち悪い」

「うわ、酷っ」

憂鬱な平日の朝。鬱陶しい程に、気持ち悪い程に、素敵すぎる笑顔で青空は私の前に現れた

学校来るの楽しみにしてる人みたい……何、その満面笑顔

「昨日はごめんね」

そう言って笑う青空。昨日の今日でその笑顔……彼氏さんとのことは上手くいったみたいだな

「彼氏さんと何話したの？」

「それがねー、聞いてよー」

聞いてるよ

「バイト増やしたんだって。私の誕生日近いから」

そういえば、もうすぐだっけ

「昨日、灰音が来る前に、彼氏に思ってること全部メールしちゃって……それでバイトの後、家に来てくれたみたい」

「そっか。良かったね」

「うん」

そう頷いて笑う青空は、とても可愛くて、綺麗だと思った

「あーあ、じゃあ私の話いらなかったんだー」

「え?! そんなことないって! 灰音がああ言ってくれたから、落ち着いて考えられたし、灰音の気持ち、知ることが出来たし」

「はいはい」

「ありがと、灰音」

「どういたしまして」

それは、久し振りの穏やかな時間だった

「灰音は?」

「え？」

「いろいろ、大変なんですよ？」

「あー……まあね」

あの人が帰ってきたことより、進路の悩みより、何より、頭から離れないこと……鳳雅に会えないことが、私を憂鬱にしている

「何とか頑張ってるよ」

そう言つて、机に突つ伏した。はあー、と溜息が零れる

「あれ？夏目くん、誰かに用事？」

青空が私から離れたのを感じながらも、私は大して気にせず、耳だけ傾けていた

「あ、いや……何でも」

「そう……」

青空が戻ってきた。私は顔を上げる

「誰か来たの？」

「ん？あー、八組の夏目くん」

誰？

「同じ委員会の男子なんだけど、用事の相手いなかったみたいだね」

「ふーん……八組か。遠いな」

私達は一組。廊下の端っこ同士だ

にしても……あの声……鳳雅に似てるような……

「まさか、ね」

そう呟き、自嘲するかのように笑った

「灰音？どうかした？」

「ん？何でもないよ。ねー、数学の宿題した？」

「え？！宿題！？嘘ー、してないー！」

だろうと思った

「ねー、灰音ー、見せてー。お願い、一生のお願い！」

一生のお願いって……何回使う気だよ

「見せてはあげない。その代わり、教えるから。ほら、頑張つて。時間はまだあるから」

「う……お願いします」

「お願いされます」

私達は笑いながら、数学の宿題を始めた

「君思う。今知りたる我的心。時よ戻れと恋願う。星に風にと、君思う」

いつもの夜。いつもの場所で、私は佇んでいた

気持ち良い風も、今は虚しく吹き過ぎるだけ

「はぁー……」

溜息も何度目だろう

ただ、隣にぬくもりが欲しい

「鳳雅……」

言いたいことが山積みで。聞いてほしいことだらけで。伝えたいことがあつて。それよりもまず……

「会いたい、会いたいよ…… 鳳雅」

また笑って？歌を聞いて？話をして。声を聞かせて。顔を見せて。聞いて……私の言葉を

いつからか大きくなっていた彼の存在

いつからとか、何でとか、そんなものはわからないけど、確かなことはわかってる

私は、凰雅が……

「っ、もう……凰雅の、バカー!!」

思いつきり夜空に叫んだ。でも、すっきりしない

そんな時だった

「えー、酷っ」

その声に、私は振り返った

「……………!!」

「久し振り、灰音。元気だった?」

「お、うが……」

いつもの笑顔で、凰雅は一人、私の目の前に立っていた

円舞曲・ワルツ・

「灰音？どうかしたのか？」

私は唇を噛み、表情が凰雅に見えないように下を向いた

こんな顔、見られたくない

凰雅は私を嫌いになったわけじゃなかった。病気になったわけでも、事故に巻き込まれたわけでもなかった

……良かった

「灰音？」

何も言わない私を訝しり、凰雅が少しずつ近づいてくる

私は動けずにいた

「怒ってるのか？ずっと待っていてくれてた、とか……」

「……………」

「ごめん、灰音。ちょっと風邪ひいて、リクの散歩は家族がしてたから……………」

違う、怒ってるわけじゃない

私はゆるゆると首を左右に振った

「え……じゃあ、何で……」

鳳雅が更に近づき、目の前で止まった

「顔、見せてよ。灰音」

気持ちが溢れてくる。とめどなく溢れて、苦しい

折角会えたのに

「灰音……？」

言いたいことがたくさんあったのに

何も出てこない

「灰音……！」

私は顔を上げていた

込み上げる気持ちを伝えたくて、伝えられなくて、私はもどかし
くなっ

「鳳雅……」

「灰音？」

「鳳雅………会いたかった……！」

「うん、オレも。オレも、会いたかった」

すっと伸びる凰雅の腕は私へと向けられ、指が私の頬を撫でた

「けど、泣くなよ。泣かれると、困る。灰音は笑顔が一番だからな」

「……バカ」

涙を拭い、私は深呼吸をした

「凰雅、歌の二番が出来たんだ。一番に凰雅に聞いてもらいたくて……聞いて、くれるかな？」

「二番？ 凄いな！ 勿論、灰音が嫌だって言っても聞かせてもらうから」

「何それ」

苦笑し、川原を向く。凰雅も隣に座った

「ずっと、探していた……一人になれる場所……何処にあるの？ 何処にあるの？ 何処にも無いよ」

風が吹く。もう、虚しくなんかない

「本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた」

思いつきり息を吸う

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて……冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shinning star」

ここから二番。緊張する……

「ずっと、見上げていた……終わりにき広い空……風が吹くよ。音を乗せた風。吹き抜ける町」

伝えたい気持ちを込めて歌う

「本当は探してたんだ、一人にならない場所……それをくれたのは夜の闇、誰でもない君でした」

私は凰雅へ向き直る。凰雅へと歌う

「風薫る月の下……夢追い掛ける街で、届けたい、私の思い秘めて……爽やかな風の中……進み、願い夢見て、歌い続けて……君に届きますように……dreaming sky」

凰雅が拍手を送ってくれる

「ありがとう、灰音。凄く、良い歌だと思う」

「ありがとう」

凰雅の隣に座る。私は、話し始めた

「凰雅に会えなくて、ずっと凰雅のこと考えてた。……でも私、凰雅のこと何も知らなかった」

「オレもずっと気になってた。灰音はどうしてるかなって。でも、灰音は気にしてないだろうなって思ってたんだ」

凰雅も、考えてくれてたんだ……

「私さ、父親いないんだ。母親は私のこと見もしないで、新しい男の所に行く。私を育ててくれたのは、祖母だった」

それから、私は母親のこと、祖母との約束のこと、学校での自分、進路の悩みを話した

「そっか……不器用なんだな、灰音は」

「不器用？」

「素直じゃない、かな」

どうせ素直じゃないですよ

「でも、進路のことはちゃんと話し合うべきだよ。灰音のやりたいこと話して、応援して貰うべきだ。だって、灰音の人生なんだから」

「うん……」

「オレも、話さないといけないよな。言い訳するつもりはないんだけど……オレ、隠してることがあるんだ」

何だろう……凰雅の隠してることで

「オレ、灰音の学校での優等生っぷり知ってるんだ。神谷灰音生徒会長」

「え？」

さつき私、名字までは言っていないよ……！？

「オレは夏目鳳雅。三年八組の、同じ学校の生徒だよ」

なっ……同じ学校の生徒！？

「ごめん、騙すつもりはなかったんだ。初めてここで見かけた時、会長だっと思ったんだけど、雰囲気違うし、もしかしたらそっくりな別人かもしれないと思って、言い出せなかったんだ。そのまま、タイミング失っちゃって……」

「そう、なんだ……」

あまりのことに、びっくりして呆けてしまった

「その……ごめん。学校の皆には知られたくないみたいだし、今までみたいに誰にも言わないよ。こうやって夜、外にいること」

「あ、うん……」

「会長、あのさ」

さつきから、別に気になっていることがある

鳳雅は信頼出来る。嘘偽りはない。そう思える。だから、鳳雅の

言ったことはびっくりしただけ。だけなんだけど……

「鳳雅……何で会長って呼ぶの？」

「えっ、あ、いや……」

「私、ちょっとびっくりしただけだよ。鳳雅のこと疑ってもないし、怒ってもないよ。だから、いつもみたいに呼んでよ。いつもみたいに、話してよ……折角会えたのに……折角鳳雅のこと、聞けたのに、何か、寂しいよ」

「……うん、ごめん灰音。ありがとう。オレやっぱり灰音のこと好きだな。可愛い」

誰もそこまでいつもみたいにしろなんて言ってないよ

「灰音……」

「な、何で近づいてくるのかな？」

「オレは、灰音が好きだよ。歌に魅せられ、灰音に惹かれた。その歌も、灰音も、全部欲しい」

何か、いつもと違う

「ね、灰音は？オレのこと、どう思ってる？」

「え……私は……」

私は……

「私は……鳳雅のこと……」

鳳雅がじっと私を見ている。緊張して、目が泳ぐ

「言つて、灰音」

優しくで楽しそうな瞳。鳳雅は期待しているんだ

私は深呼吸をし、決意した

「私も、鳳雅が好き」

「灰音っ！」

「うわっ！」

鳳雅に思いつきり抱きつかれ、私は驚いて声を上げる

「オレ、凄く嬉しい」

「鳳雅……」

「灰音、オレの彼女になって」

その申し出に、私は迷うはずが無かった

「はい」

「っしゃ！ありがとう、灰音。これからも、宜しくな」

「こちらこそ宜しく、凰雅」

満面の笑みを浮かべる凰雅を見て、凄く嬉しくなると同時に、まるで子どもみたいで可愛いと思った

「そつえばリクは？」

「家にいるよ。オレ、学校で落ち込んでる灰音見かけてさ、会いに行かなきゃって思ったんだ」

もしかして、今朝青空が言ってた夏目くんって……やっぱり凰雅のことだったんだ

「あ、ケータイ貸して」

私がケータイを出すと、凰雅は二台のケータイでアドレス交換を始めた

「登録完了っと。いつでもメールや電話してきて。オレもするから」

「わかった」

ケータイを受け取り、凰雅のデータを確認する。何だか見てるだけで嬉しくなってきた

「あー、今日は帰りたくないなー」

「何を言い出すかと思えば……」

「だって、オレ今幸せ過ぎて、これが夢だったらどうしようって考えてる」

大げさだなあ。ま、その気持ち、わからなくないけど

「大丈夫だって。夢じゃないし」

「うん」

それから、川原沿いを歩いたり、話をしたりしながら私達は暫く会えなかった寂しさを埋めるように、並んで過ごした

「そ、青空？どうしたの、怖い顔して……」

「どうしたの？へえー、そんなこと言うんだー」

翌日の昼休み。私は青空に半眼で睨まれていた

「いつのまに彼氏作ってたわけ？」

「付き合い始めたのは昨日だよ。な、灰音」

昼休みになり鳳雅が私を訪ねて来てから、一向に離れようとしな
い。これは何も言わなくても私達の仲が知れたようなものだ

青空には何も言っていなかったため、怒っているらしい

「夏目くんのこと知らなかった癖に、何で今日には付き合ってるの

？」

頭の中も混乱しているらしかった

「鳳雅の名字知らなかったんだよ。鳳雅のことは、結構前から知ってたし」

「へ？何それ、どういうこと？」

首を傾げる青空に、私は鳳雅と出会った時のことから今までを、全て話した

「そんなことって……あるんだ？でも、やっぱり灰音ってば、モテモテだよー」

「そんなことないよ」

「何言ってくれちゃってるかなー。今まで告られた数は？数えきれないくらいの癖にー」

だって、それは作った私の顔に対しての、優等生の会長に対しての好意だから……それは私じゃないよ

「ま、でもこの様子なら、すぐに知れ渡るだろうね。神谷生徒会長に彼氏が出来たって」

だろうな……鳳雅、べつたりなんだもん

「灰音、嫌そうな顔してるけど、嫌なの？」

あんまり騒がれたくないし

「え？嫌なのか？オレ、わざとべったりくっついて、見せ付けてるのに」

「……………え？何で？」

「何でって、決まってるだろ。灰音はオレのもんだって、皆に知っててもらわないとさ。取られたくないし」

当たり前のことかのように、堂々と言い放ったよ、この人

「夏目くんて、おもしろーい」

面白くない……………！

「はぁー。何か居づらいから、私教室行ってるね」

「えっ、青空？」

「じゃーねー。ちゃんと五時間目は出るんだよー」

どついう意味だ！

「……………行っちゃった」

「真田さんに悪いことしちゃったかな？」

「大丈夫だよ。青空は気にしてないだろうし」

しかし、どうしようか。話すネタ尽きなきやいいけど……

「灰音は、昼休みいつも真田さんここに来てるのか？」

「うん、大抵ここにいるよ。凰雅は？」

「オレは教室か食堂かな。その時によるってカンジ？」

「ふーん……いつもパンなの？」

「そ。何？灰音、作ってくれるの？弁当」

ん？思わぬ方向へ流れたな

「料理得意じゃないよ」

「そんなことないだろ。さっきの弁当、凄く美味しそうだったし。貰った玉子焼き、かなり美味しかったよ」

「……ありがとう」

「ま、勿論灰音が嫌じゃなかったらの話だけど」

「別に私は嫌じゃないよ。自分の分作ってるし。その……凰雅が欲しいなら、作るけど」

「マジで？良いの？」

そんなことを言っていると、チャイムが鳴った。五分後に授業が始まる

「そろそろ戻ろうか」

「戻りたくないなー、オレ」

「何言ってるんだか。さ、行こっ」

私達はそれぞれの教室に向かって歩いていった

「灰音さん、よく来てくれました。さ、どうぞ」

「はい」

休日、私は祖母の家へ来ていた。進路の話をするために

実は学校側にはもう言っているし、それで準備は進めてる

私は和室で出されたお茶を飲んでいた

「早速ですけど灰音さん、話を聞かせてくれるかしら」

「はい」

大丈夫。さっき電話で鳳雅も言ってくれた。ちゃんと話をすれば、わかってくれるって

「私……実は、どうしても、やりたいことがあるんです。でも、反対される気がして、言えなかったんです」

「反対だなんて……まあ、職業にもよりますよ？でも余程おかしいものでない限り、反対なんてしません。この間も思いましたが、灰音さんは勘違いをしているようね」

勘違い？

「灰音さんの夢だもの。灰音さんの人生だもの。私は大学に行って偉い人にならなければいけないと言ったことは無いはずです。私は灰音さんがなりたいものになれるように、不自由しないように、勉強も頑張つて欲しくて無理を言いました。でも、なりたいのになれない……そんな思いをして欲しくなかったの」

「……」

「貴方の母親は、毎日遊んでいました。次第に学校も休みがちになり、勉強はしなくなって……そんなある日、あの子は病氣になってお医者様のお世話になったのです」

病氣？

「それから、あの子は医者を目指そうとしました」

「医者を？」

そんなの初耳だ

「でも、ずっと遊んでいたこともあり、あの子は普段の授業にも追いつけず、夢を諦めてしまいました」

「……」

「それからは、より遊びに走り、今のようなことを繰り返すようになったのです」

それでこの人は私に……だけど

「そんな甘えたことを私に言わないで下さい」

「甘えたこと？」

「そうです。そんなことで諦めた夢なら、そこまでの夢だったということでしょう？」

「灰音さん……」

「私にも、言えることかもしれませんがね……とにかく、あの人の失敗談を聞かされても、困ります。私は、同じ道は辿りませんから」

はつきりと豪語した。それだけの自信がある

「確かに、勉強面では今から苦勞するリスクがないのは助かります。ですが、結果がそうだとして、このやり方に賛同は出来ませんね」

目の前の人は黙ってしまった。私はふう、と息をつく

「そんなことより、本題ですが……」

私は頭を下げた

「私は、音楽を習いたいんです。音楽を……歌を専門に学べる学校へ行かせて下さい」

「音楽？」

さあ、どっちに転ぶのか、この話……

「わかりました。頑張ってくださいね」

「……………」

「灰音さん？」

こんなにあっさり承諾してもらえると……私は意外すぎて、呆気にとられてしまった

「あ、いえ……ありがとうございます」

「……灰音さん、もう一つ……話が、あるのです」

急に言い淀み始めた……何の話だろう

「本当は口止めをされていたのですが……」

私は黙って聞く。目の前の人は、言いにくそうに、しかし続きを話し始めた

「実は、灰音さんの大学でかかる費用……負担するのは、私ではないのです」

「え？」

この人以外に、一体誰がいるというんだ

私は考えを巡らせたが、思いつくはずもなく、黙って続きを待った

「私にも、灰音さんが大学に通えるだけのお金があります……ですが、本人の希望により、私は今回はお金を出さないことになりました」

この人、一体どれだけの資産があるんだ？

それより、だから一体誰だというんだ。私の学費を出してくれるという人は

「どなたなのですか？その方は」

「信じられないかもしれませんが、事実です。よく聞いて下さいね……その人は、貴方の母です」

「……………はい？」

信じるも何も、あの人にお金なんてあるわけがない。一体何の冗談だというのか

「何を仰っているのです？あの人に、そんなお金があるわけないじゃないですか」

大体、そんなお金があれば、あの人はお金のために使うに決まっている

私のため？そんな人じゃない

「冗談はよして下さい」

「冗談ではないですよ、灰音さん。私も最初は信じられませんでした。あの子は、遊んでなどいなかったのです。貴方が幼い頃は、私達が思っている通り、次から次へと様々な男性と遊び歩いていたようです。ですが、いつからかは定かではありませんが、あの子は働いて貯金をしていたようなのです」

「働く？あの人が？」

「今回あの子が帰って来た目的は、灰音さんの進路とその学費の話をするためのようです」

「進路？」

「貴方が行きたい道を行かせて欲しいと……大学に行かなくても構わない。就職でも進学でも、歌手になりたいと言っても応援して欲しいと」

それを、あの人が……？信じられない

「私もそのつもりでしたから……反対なんてしませんでした」

私は今、夢を見ているのだろうか

「灰音さん、あの子は正直に話さないかもしれません。また黙って出ていくかもしれません。それでも、今話したことは事実なのです。」

通帳も見せて貰いました。こっそり、働いている姿も見てきました。きちんとした会社でしつかりと働いた、紛れもない、あの子のお金でした」

この人は、冗談や嘘を言う人ではない。こんな信じ難い話が、本当だと信じるしか話は進まない

でもそれは……

「……そんなこと言われても」

認めたくない

「一度、あの子と話をしてみてはどうです？」

私は拳を握り締め、ただ黙って俯いていた

帰ると、あの人はテレビを見ながら楽しそうに笑っていた

「あ？いたんだ」

「今帰った」

ふーんと言いながら再びテレビに顔を向けている人に、私はその場に座りながら声を掛けた

「今、あの人に会ってきた」

「……ふうん」

「何処の大学行くか聞かせろって言うから……お金出してくれるんだし、それくらい言っとかないとって思ったからね」

「……」

「音楽……歌を勉強出来る学校へ行きたいんだ。良いよね？」

そう言つと、あの人は振り返つた。怪訝でいて、驚いた顔で、まじまじと私の顔を見てくる

「何であたしに許可取るわけ？あの人に許可貰ってきたなら、それで終わりだろ？あたしには関係ないってのに」

久々に喋ると思えば何を、とか何とか言っているのを無視し、私はもう一度言つた

「良いよね？」

「だから……」

「良いよね?!」

「……わかつたわかつた。良いから、好きにしろ」

その言葉を聞き、私は立ち上がる。踵を返し、ドアの前で立ち止まつた

「お金、ありがとう……母さん」

それだけ言つて、私は部屋を出る。初めて母さんと呼んだ。それが、私が出来る精一杯のお礼だった

「灰音……」

その呟きだけが、ドア前にいた私に聞こえていた

「もう、灰音可愛い！」

「苦しい、青空。離して……」

「ごめんごめん」

次の日の月曜の朝。あの人との出来事を学校で青空に話していた

因みに凰雅には既に昨夜会った時、話している

「可愛いなー、灰音」

昨日の話のどこに私の可愛さはあっただろうか？記憶を辿るが、欠片も見つけられなかった

だから半眼で青空を見てやった

「うわ、それ可愛くない」

そりゃあ、そんなつもりではないからな

「でも、びっくりだよねー。よく信じたね、灰音」

「今でも夢みたいだけどね」

でも、そう……少しは素直に受け止められている。自分らしくないようで、でもそれが私なのかもしれない

「夏目くんの影響か？」

青空がにやにやしながらそう言った

そうかもしれない

昨夜、寝る前にそんなことを考えていた。鳳雅に出会ってから、私は変わってきていると

「でも、そっかー。灰音は音楽の道か」

「青空は？」

「就職。で、お金貯めて美術を習うんだ」

何だか青空らしいと思った

「そっか。頑張れ」

「灰音もね」

笑いあっていると、チャイムが鳴った。私達は席に着く

何気ない一日が始まった。そう思っていた

昼休み。私は凰雅と青空と一緒に教室にいた

「次の授業何だっけ？」

「古典」

「寝ていい？」

「それは勝手。でもノート貸さないから」

「う……」

青空が机に突っ伏した。私達はおかしくて笑う

天気の良いのどかな昼下がり。お腹も満たされ、眠気が襲ってきた
そうだ

だが、訪れたのは真逆の出来事だった

「会長、夜遊びしてるでしょ？」

「え？」

私に近づいてきた同じクラスの女子生徒。あまり話したことはないが、成績優秀で順位は私の次だ

その子が何故、突然そんなことを言いだす？バレたのか？

「何言つて……」

「私、昨日見たの。夜遅くにバイクに乗って、公園から走り去る會長を」

見られた……？！

「昨日はちよつと用事で……」

大丈夫。バイク通学は禁止されているが、乗ってはいけないとまでは言われていない。その点では不利なことではない。ただ、イメージ的にちよつと意外くらいで済むだろう

「バイクに乗るのね。意外だね。でもあんな時間に用事なんて……まあ、良いわ。それより、私もつと面白いこと聞いたんだけど」

「面白いこと？」

「そ。中学一年くらいだったらしいけど……不良達のたまり場に毎晩行つて遊んでたんだって？もしかしてヤバイ薬とかしてたりして」

私は愕然し、固まってしまった

頭が上手く働かない

どうしよう……そもそも、何処からそんな話が出て来た？あの頃だつて誰にもバレなかった。知っているのは青空と祖母くらいの八

ズ……行っていた地域は近くはなかったため、不良メンバーもまず出会うことはない連中ばかり。知られるはずはない……

「何のことです？誰がそんな話……」

そう努めて冷静に返す。しかし内心は消し去りたい過去を持ち出され、パニック状態だ

「そんなこと、どうだって良いでしょ？私は聞いたの。灰音って女の子がいたことを」

「同じ名前の他人かもしれないのに？私だって確証は何処にも無いでしょ？」

「会長、よく喋るわね……真実味が増したカンジ」

私は齒噛みした。何を言っても誤魔化しになってしまう

「だから？」

不意に聞こえてきたのは、凰雅の声だった

私は驚き、彼を見る

「夏目くん？」

「だったら何？」

そう言って顔を上げた凰雅の表情は、今まで見たことが無かった

凰雅が怒ってる……

「灰音が中学の時本当に不良だったとして、それが何だって言うんだ？！中学の時の話だろ。今はやってないなら、良いじゃないか。過去より今だろ！」

「凰雅……」

真剣に私のために怒ってくれている彼に、こんな時だが不覚にもときめいてしまった

「違うか？」

「……」

さっきまでの威勢は何処へやら。彼女はぐっと押し黙っている

「誰だっているんな過去があるだろ。灰音は今を頑張ってるんだ。だったら、それで良いんだよ。な、灰音。灰音も気にすることないんだ」

「うん。ありがとう」

凰雅の言葉は凄く嬉しかった。私は、ひた隠しにしてきた過去をそう言ってもらえて、心がスツと軽くなる気がした

「……そうね、ごめんなさい。あの完璧な会長に意外な過去があるって知って……私、勉強でどうしても会長に勝てないから、イライラしてた。勝手に対抗心燃やして、勝手にイラついて、みっともないわね」

彼女は自嘲し、頭を下げてから踵を返した

私はその背に、声を掛ける

「対抗心ぐらい、普通だつて。次もお互い頑張ろ」

彼女は立ち止まったが振り返らず、こくんと一つ頷いて、教室を出ていった

「優しい、灰音」

一部始終を傍観していた青空が、にやにやしなから言う。にやにやするな

「優しいか？」

照れ隠しも込め、そつぽを向くと、凰雅の優しい笑顔があった

「ありがとう、凰雅」

「何のことだ？」

「言っておきたかっただけ」

二人で微笑み、この話はここまでで終わった。それから凰雅が過去のことを聞いてくることはなかった

「灰音、良かったね。本当のことバレちゃったけどさ」

夕方、青空と凰雅との帰り道。私は空を眺めながら自転車を押していた

「うん……」

「灰音、変わったね」

「え？」

「ちょっと雰囲気が柔らかくなった」

「だよな」

「そう？自分じゃ全然わからないんだけど」

「あ、月……」

暮れていこうかという空に、見逃してしまいそうな白い月。見えても見えなくても、そこにあるもの

私の心にいる、凰雅みたい

「ずっと、探していた……一人になれる場所……何処にあるの？何処にあるの？何処にも無いよ……本当は知ってたよ、何処にも無いって……それでも私は一人を探して、夜の中を歩き続けた……限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて……冷たい風の中……歩き、求め彷徨い、歌い続けて……空へ届きますように……shining star」

突然歌いだした私に何も言わず、黙って聞いてくれる青空と凰雅

その二人のために、私は歌う

「ずっと、見上げていた……終わりになき広い空……風が吹くよ。音
を乗せた風。吹き抜ける町……本当は探してたんだ、一人にならない
場所……それをくれたのは夜の闇、誰でもない君でした……風薫
る月の下……夢追い掛ける街で、届けたい、私の想い秘めて……爽
やかな風の中……進み、願い夢見て、歌い続けて……君に届きます
ように……dreaming sky」

どこまでも届いてほしい。この想いごと伝えればいいのに

「限らない星の下……夢を忘れた街で、眠れない、私の願い秘めて
……爽やかな風の中……進み、願い夢見て、歌い続けて……君に届
きますように……dreaming sky……私が私であるよ
に」

ふう、と息をつく

「最後まで聞いたの初めて」

「オレも」

にこつと笑う青空、微笑みかけてくれる凰雅。私も笑みが零れる

太陽と月の下。爽やかな風が吹き抜ける町は、昔嫌いだった町

そこで私は音を紡ぐ。想いを乗せ、物語を奏で、空に届けと願う

誰のためでもない、たった一つ揺るがない、私の意志

「灰音、また明日ね」

「うん」

「灰音、またな」

「うん」

また、明日……いつものように時は巡る。永遠なんてものは無いけれど、有ると信じたって良いよね

ずっとこのままでいられたら……

大好きな気持ち、枯れないように

ずっと、歩いていた

風の流れる場所

何処に行くの？何処まで続く？何処でもないよ

本当は知ってたよ、終わりは無いって

それでも私は誰かを探して、闇の中を歩き続けた

太陽と月の下

光輝く街で、走りだす、今こそ風を受けて

優しい風の中

時に、羽を休めて、歌を奏でて

キミへ届きますように

f o r e v e r y o u

暗い気持ちの闇も、明るく笑う光もどっちも私

どちらかを隠しても、意味はない

全てが私なのだから

私は今日も、闇を駆け抜ける

E N D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6357k/>

灰姫ノ歌-ハイヒメノウタ-

2010年10月11日02時31分発行